

でなければならない、とマーラーは考えていたのだ。

六週間にわたる苦心の交渉の末、ラングリー商務官は、得意の腕を発揮して、話をまとめた。当初の要求値より二万五千円安い四十二万五千円で購入の運びとなったのだ。現中国大使で東京勤務の経験も持つアーサー・メンジス氏など、一部の人は、その土地をそのように有利な値で買うことができたのは、その土地は幽霊が出るから外国人以外は住めないという噂がその頃あったからと言う。実際にはおそらく、青山家が民間業者に売るより、外国政府に譲り渡す方を選び、そのためには金銭的な損失をも受け入れることにした、というのが本当のところだろう。

「私は第一級の建物にするつもりでお

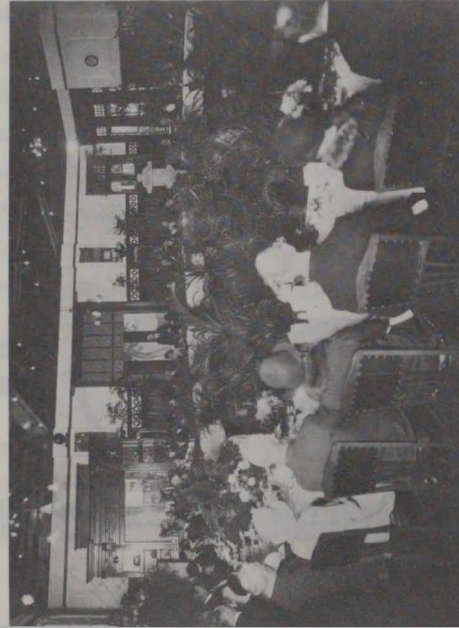


庭から見た公邸。

ります。ご存知の通り、私はわが国の政府に対し素晴らしい結果をもたらしたいと望んでおります」とマーラーは首相に語っている。この約束を実現するために、マーラーは大林組に工事を依頼した。大林組は米国大使館の建設を手がけた、日本で最も業績のある建設業者である。建設計画全体の指揮と具体的な設計図の作成は、有名な建築家フランク・ロイド・ライトの弟子アントニン・レイモンド氏に依頼した。技術的な問題はJ・J・スパーガ氏に任せ、現場監督にはT・タケイ氏（漢字は不詳）を頼んだ。他方、地震多発地の建築技術に関する国際的権威、内藤多仲早稲田大学教授に各段階での助言を依頼した。マーラーが選んだカナダ大使館建設チームが立派な仕事を成し遂げたことは、あれから四十五年たった現在も大使公邸および大使館事務所として立派に使われている建物に、はつきり現われている。

以上のように最高のスタッフを揃え、万全の用意をした上に、さらにマーラー

自身があらゆる面に常に目を配った。彼は計画案、設計図、それに調度品のサンプルにまで何か月も熟慮を重ねた。調度品のサンプルに至っては、オタワに送ってそのままロンドンへ移送させたほどだった。ロンドンには若き同僚のジョージ・パニエーがいて、サンプルがイギリス



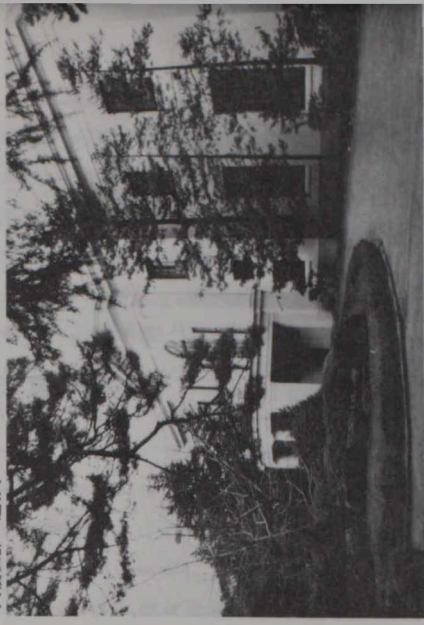
大使での宴会会（一九二九年）。
マーラー公使があいさつしている。

の仕入れ業者にきちんと届いたかどうかを確認するようにマーラーから言いつかっていた。このパニエーとは、もちろん後のカナダ総督（一九五九―一九六七）その人である。

工事がはば始まろうとしていた時、「契約上の問題が生じないならば」工事を一時延期されたし、との指示がオタワから届いた。重大な国際危機（アメリカはちょうどその頃金本位制を廃止したばかりだった）が生じたというのがその理由である。マーラーは驚天した。重大な危機とは何を指すのか定かではなかったが、とにかく彼はこの指示にがっかりした。とありあえず定礎式の予定を取りやめたが、このことは一大盛典を期待していた多数の在日カナダ人をいたくいらだたせた。マーラーは急いで業者と相談した結果、延期はもちろん不可能ではないが、その場合には一万七千五百五十六ドルの出費増となる、ということがわかった。そこでマーラーは、首相からの指示には自分

に十分な自由裁量の余地が残されていたのを思い出し、工事を続行させた。幸いなことに、首相は後になってマーラーの決断に同意を与えている。一九二三年十一月二日に公邸が完成し、次いで同日に公使館が完成した。それらを引渡された時、マーラーの誇りは少なからぬものであつ

大使公邸の近影。



た。カナダ最初の恒久的公使館は、予定日程に遅れることわずか六十四日、予算のオーバー分わずか五万四千九百二十一ドルで完成を見たのだ。一九二九年、マーラーが公使に任命されて六週間後に初めて立案され、四年後に完成したその建物は、それ以来ずっと日本におけるカナダ代表部の建物として使われてきたわけである。その過程で、マーラーは内閣二代にわたる逡巡に直面してきたが、いみじくもかつてキング首相によって認められたマーラーのねばり強さが、あらゆる障害を克服して、ついに成功をもたらしたのだ。

恒久的な駐日カナダ公使館（現在は大使館）は、その必要性から、そしてまたカナダに対する誇りの念から生まれた。そして今日では、初期のカナダ外交を貫ぬいていた高い理想を讃える記念碑として残っている。それはまた、公務を他のあらゆる事柄に優先させて任務に専心した、サー・ハーバート・マーラーならびにマーラー夫人を讃える記念碑でもある。